

巻頭言

子どもの世界を楽しむ

岸井 慶子

五年ぶりに短大に戻った。もともと幼稚園現場のほうが長いので「戻った」といういい方はあたらないかもしれない。ともあれ、三歳から六歳の子どもの声や、愛らしくも必死に活動する姿に囲まれて毎日を送る生活から、短大生とともに保育を考える生活へと変わった。その生活変化の中で痛感したのは、笑わなくなった、ということ。お腹の底から笑う機会がかなり減った、思いもかけぬことに出会うことが減った、ということ。

それでも時おり、ビデオを片手に保育観察をさせていただく機会に恵まれる。それは私にとって、大いに子どもの世界を楽しみ味わう絶好のチャンスとなっている。担任や園長を務めていた時のような責任から離れて、ある意味で自由なゆつたりとした目で子どもの世界をみつめる機会となっている。先日も思いがけず、必死で笑いをこらえながらビデオを撮り続ける場



面に出会った。

それは二年保育四歳児学級で、ひと遊び終わったあとの十一時すぎのこと。数人の男児が楽しんでたマジレンジャーごっこがだんだんエスカレートしていった。内の一人が相手の持っていた空箱を奪い取って挑発。さらに、その箱で相手の頭をペコンと叩いた。その音が、ペコンだかポコンだか何しろ楽しくなってしまう音だったようで、たちまち広まった。四、五人の男児が面白がって誰かれかまわずペコン、ペコン、と相手の頭を思い切り叩きまわる。ちょうどその時、園庭から「お部屋の人も、そろそろ片付けましょう……」という担任の声。その途端、全員が申し合わせたように一斉に自分の頭をペコン、ペコン、ポコン、ポコンと叩き出した。行動がだんだんエスカレートしてきたのを見てきた私は思いもかけぬ展開に笑いをこらえきれず、片手でビデオが揺れないようにしながらもう一方の手で笑い声がもれぬようしっかりと自分の口を塞ぐこととなった。

また、同じ日に五歳児の学級では、段ボールをいくつも使って様々なものを制作するグループ活動の様子を観察することができた。

四、五人が丸くなって座り、恐竜の首になる段ボールを胴体部分にガムテープで固定している場面。いつのまにかガムテープを切る人、貼る人の分担ができてきた。A男がガムテープを渡され指で切ろうとする。なかなか切れない。引っ張ったりねじったり、苦勞している。そのうちよじれて貼りつき使い物にならなくなったガムテープを、どうにかしてくれとでもいうように隣のB男に差し出す。しかしB男は自分の作業に忙しく取り合ってくれない。今度は反対



側のC男に差し出すがやはり取り合ってくれない。すると、D男が近寄ってきて受け取り、よじれたガムテープの端を引き剥がすようにしながら切り始める。

この様子を私は「どうなるのだろうか」とはらはら、どきどきしたり「ああ良かった、友達っていいな」などと喜んだりしながら見続ける。時々「がんばれ」という思いを込めてA男の手元や表情をアップにする。とうとうあきらめてしまい、なんとなくしよげた様子のA男の姿に、なんだか見てはいけないものを見てしまったような気さえする。

しかし、しばらくして再びA男がガムテープをちぎる場面となる。今度はややぎこちないが切った。なかなか一度では切れないが切った。肩から手までを大きくひねるようにする。二、三回繰り返し返すと、今度は無駄な動きをしなくても切れる。

ここで私は「やったー」と喜び、「すごい」と驚く。何かとてもうれしくなり、なぜか得をしたような気持ちになる。

保育後に、今度は担任の先生方とビデオを見ながら話し合う。もう一度、楽しめる。先生方と笑ったり、驚いたり、はらはらしたり、考え込んだりしながら今日の保育を、今日の子どもの姿をもう一度味わわせてもらう。ビデオを細かく見直すことで新たな発見もある。例えばガムテープが切れなかったA男が隣で切っている男児の手元をじっと見ている姿があり、切れるようになる迄の時間がわずか（A男にとってわずかと言ってよいかどうか、考えなければならぬ）二十分であったこと。また、四歳児の遊びが暴力的な方向にエスカレートしていく時に突然笑わせるしぐさが出てきてその場の緊張が緩む場面が幾度も見られることなど、その他



にもたくさんあった。そして、先生方のお話からそれまでの経過や先生方のそれぞれの幼児に対する思いのいろいろを知り、より深く多面的にその場やその行動の意味を理解することになる。

こんな風に、少しだけ無責任なところから子どもの世界を見せてもらえるのが今の私にとって楽しくて楽しくてたまらない。それはもちろんビデオ観察を受け入れ、一緒に見直し、発見し、話し合ってくれる先生方の存在を抜きにしては考えられない。先生方や子どもたちに感謝したい。そして、子どもの世界は「みる」のではなく「みせてもらう」ものだという思いをますます強くしている。

今、大きな転換期を迎えている保育界では、子育て支援、幼保一元、第三の幼児教育施設など幼児教育の制度や現実的な対策、方法に関する論議が多く聞かれる。あちらこちらで開かれる研修会で取り上げられる内容もしかり。次々と変化する状況への対応に追われ、ゆつくりと幼児の世界を楽しむゆとりを失っている保育者もいる。ていねいに子どもの行為を記録し読み取り、その意味を考え、自分の保育のありようを考える。それらを仲間と議論しながらより深め、子どもの世界に近づく。そんな地道な作業が減ってきているのではないだろうか。かつて、私たちが先輩保育者のリードのもとでああだこうだと議論しながら学んだ「子どもの姿から学ぶ」ということが、次の世代に十分伝わっているのだろうか。少し心配している。

(千葉明德短期大学)

